

坊やの目守るからね



カチャニクさん(左端)をはじめ、関係者全員が笑顔で臨んだ退院会見。母親のヒュルメーテさんに抱かれたネジール君は、少し眠たかった様子

「この十年間、私の医療技術の進歩はほとんどなかった。だから、日本のみなさんの厚意による今回の研修は非常にうれしい。コソボ住民への大きな支援になります」。そう話すのはユーゴスラビア・コソボ自治州からやって来た眼科医師ガズメンド・カチャニクさん(40)。

カチャニクさんは、金沢大学付属病院で目の治療を受けていたネジール・シニツク君(3)の帰国後の治療を担当するため、十月に来日し同病院で研修を受けている。

紛争はコソボの医療事情にも深い影を落とした。網膜芽細胞腫を患うネジール君も、コソボでは治療を受けることができず、首都ベオグラードで三月に右目の摘出手術を受けた。だが、紛争の激化でその後の治療

近くコソボに帰国 難病少年の治療へ研修

を受けられず、両親ともに七月に来日した。左目の腫瘍は、レーザー光凝固装置による治療と抗がん剤投与によってほぼ消滅し、この八日に帰国する予定だ。とはいえ、再発の危険性は残っている。また、コソボに最新医療機器はなく、抗がん剤の確保もままならない。不安定な電力供給に悩む医療施設も多い。

日本での治療を実現させた日本アルバニア協会(本部・金沢市)などが設立した「ネジール君を支える会」はこのため、「ネジール・プロジェクト基金」(電話03・3918・3016)に衣替えし、コソボの医療全般を継続支援する活動を始めた。

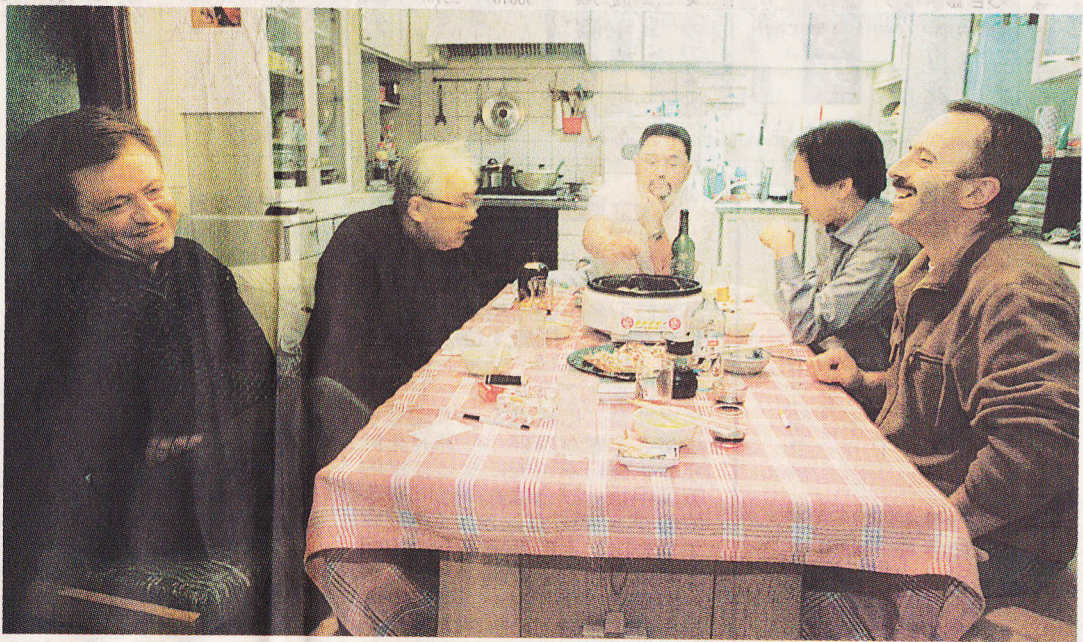
民間の善意に感謝しながら、カチャニクさんは今月中旬、ネジール君を追ってコソボに帰る。

● カメラとペン 森田 昌孝

● レイアウト 浅野 俊哉



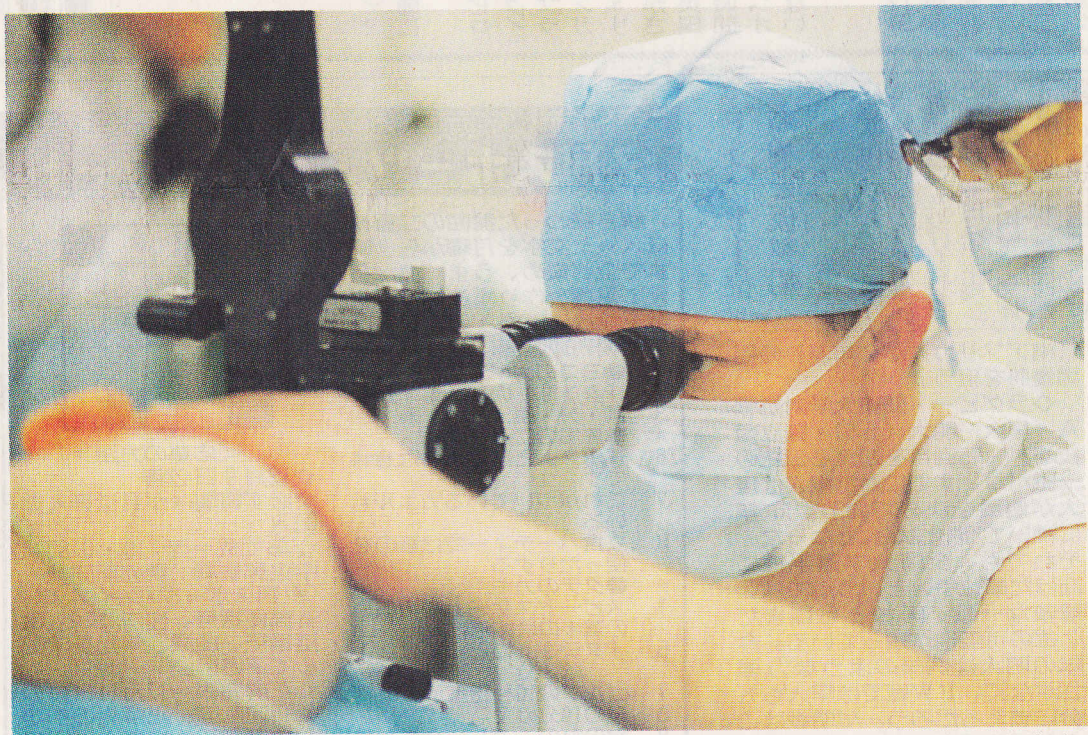
入院中は小児科の廊下で遊ぶことが多かったネジール君。コソボに帰ったら、両親に買ってもらう約束の自転車を楽しみにしている（金沢大学付属病院で）



ネジール君の父親、アブドゥラハマンさん(右端)が泊まり込んでいる日本アルバニア協会員宅に招かれた力チャニクさん(左端)。日本とコソボでは、家の中で靴を脱いだりあぐらで座るなど共通の習慣が少なくないという

WEEKLY

ズムマツ



ネジール君（手前）へのレーザー光線による治療で、装置の操作方法を学ぶカチャニクさん。高価な装置のため、コソボには1台もないが、ネジール君と同じ病気で治療を待つ子どもは約60人いる